松河戸遺跡ＳＤ105について

岡本　直久

１．はじめに

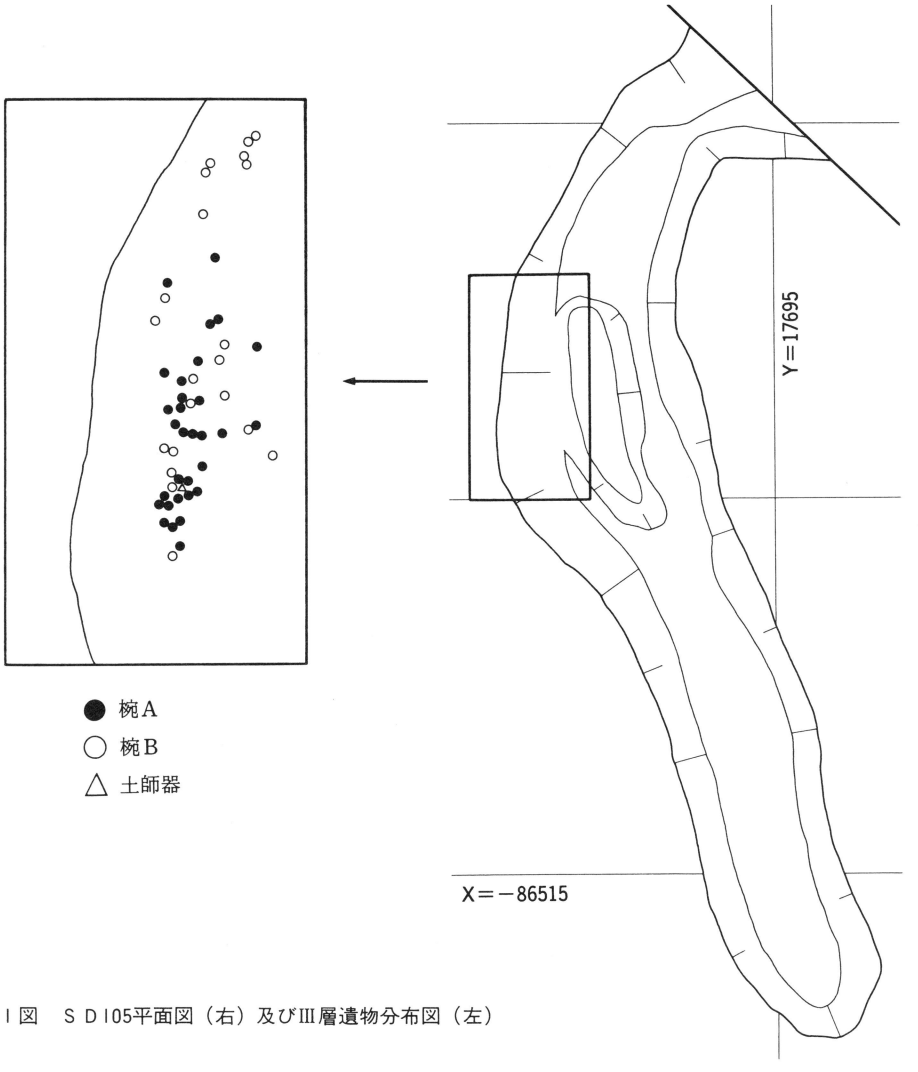
松河戸遺跡は、春日井市松河戸町を中心として西は町田遺跡に接し、東は庄内川に至る広大な面積をもつ。過去３年間の調査において、近世以降の条里制水田跡がほぼ全域に、その下面では、数ヶ所の微高地に縄文時代前期～古墳時代の遺構が散在することを確認している。ところが、中世のまとまった資料は検出されず、わずかにみられた遺構(1)についても、その希薄性から、上面遺構である水田跡の開始時期を限定する物差しとしての役割を担うに過ぎなかった。しかし、水田耕作土およびその直下に広がる灰色粘土層に含まれる遺物の大半が灰釉系無釉陶器、所謂「山茶椀」であることから、中世の生活址の存在を予想し得た。

松河戸遺跡89Ｄ・Ｆ区の調査で検出された13～14世紀の遺構群は、松河戸遺跡における空白の時期を埋める重要な資料と考え、その一部を紹介することとした。

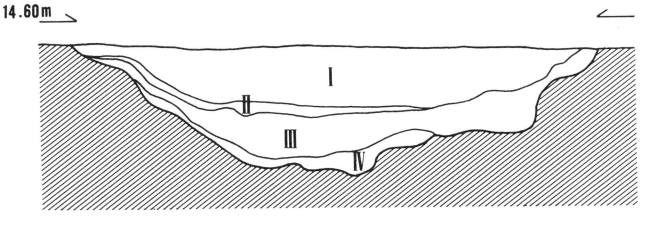
２．遺構

今回取り上げた一括資料は、松河戸遺跡89Ｆａ区ＳＤ105において検出したものである。ＳＤ105はＬ字状に曲がる溝で、このうちＦａ区にかかるのは南北方向の溝（西溝）である（第１図右）。西溝は長さ約12.9m、幅約1.8m、深さ0.6mで、西に向かって若干屈曲する。溝の南端は立ち上がって終わり、北端は東に折れた所で調査区外に及ぶ。溝の南半分は東西両肩がほぼ平行するが、北半分は西肩が外に張り出し、そのため全体的に弧状を呈しているように見える。最大幅2.8mである。また、この部分の底部は楕円形に0.2m程度落ち込む。

ＳＤ105の基本層序は、Ⅰ：灰色粘土ブロック、Ⅱ：Ⅰ層及び鉄分、Ⅲ：暗灰色粘土、Ⅳ：暗青灰色粘土である（第２図）。この内、遺物を含むのはⅠ層とⅢ層である。両層とも遺物の出土地点は西溝西半に偏っているが、Ⅰ層が溝の北端から南端まで隔たりなく遺物の出土を見るのに対し、Ⅲ層は西肩が外に張り出す部分に集中する。また、遺物を比較してみると、Ⅰ層がほとんど破片であるのに対し、Ⅲ層は完形が目立つ。Ⅳ層は、楕円形の落ち込みの埋土である。



第１図　ＳＤ105平面図（右）及びⅢ層遺物分布図（左）



第２図　ＳＤ105断面図（１：40）

3．遺物

ＳＤ105の出土遺物は、その大半を灰釉系陶器、一般に「山茶椀」と呼ばれる無釉の椀・皿が占めている。これらは、前述した如くⅠ層とⅢ層で異なった破壊状況を示しているが、遺物自体に両層の違いを見出せるであろうか。

無釉陶器を分類するにあたり、まず、胎土を基準に２つの大枠を設定した。１つは、胎土粒子が細かく表面が滑らかで器壁の薄い椀・皿（椀Ａ・皿Ａ）、もう１つは、胎土が粗く表面がザラつき器壁の厚い椀・皿（椀Ｂ・皿Ｂ）である。その上で、それぞれを器形により型式分類した。

・椀Ａ

椀A_1（第３図１、第５図１）高台がしっかりしており、腰部に張りがある。内面底部中央がやや高く、体部との境に稜を持たない。口縁端部は丸く仕上げられる。口径は14.5cmを中心とするが、最大と最小の差は２cm近く、器高も5.5cmを中心に１cm以上の差がある。

椀A_2（第３図２～６・12～14、第４図１～９、第５図２）高台が低く退化する。体部は内湾気味に開き、口縁直下で外反する。口縁部はやや肥厚し、面取りが行なわれる。内面底部は強くナデられ、そのため底部器壁が極めて薄くなる。内面体部と底部との境には稜が見られる。この類は、口径が13.8cmを中心に、器高は5.7cmを中心に、共に１cm以内で納まる種類と、口径が11cm台、器高５cm台の規格性を強く持つ「小椀」（第３図12～14）がある。

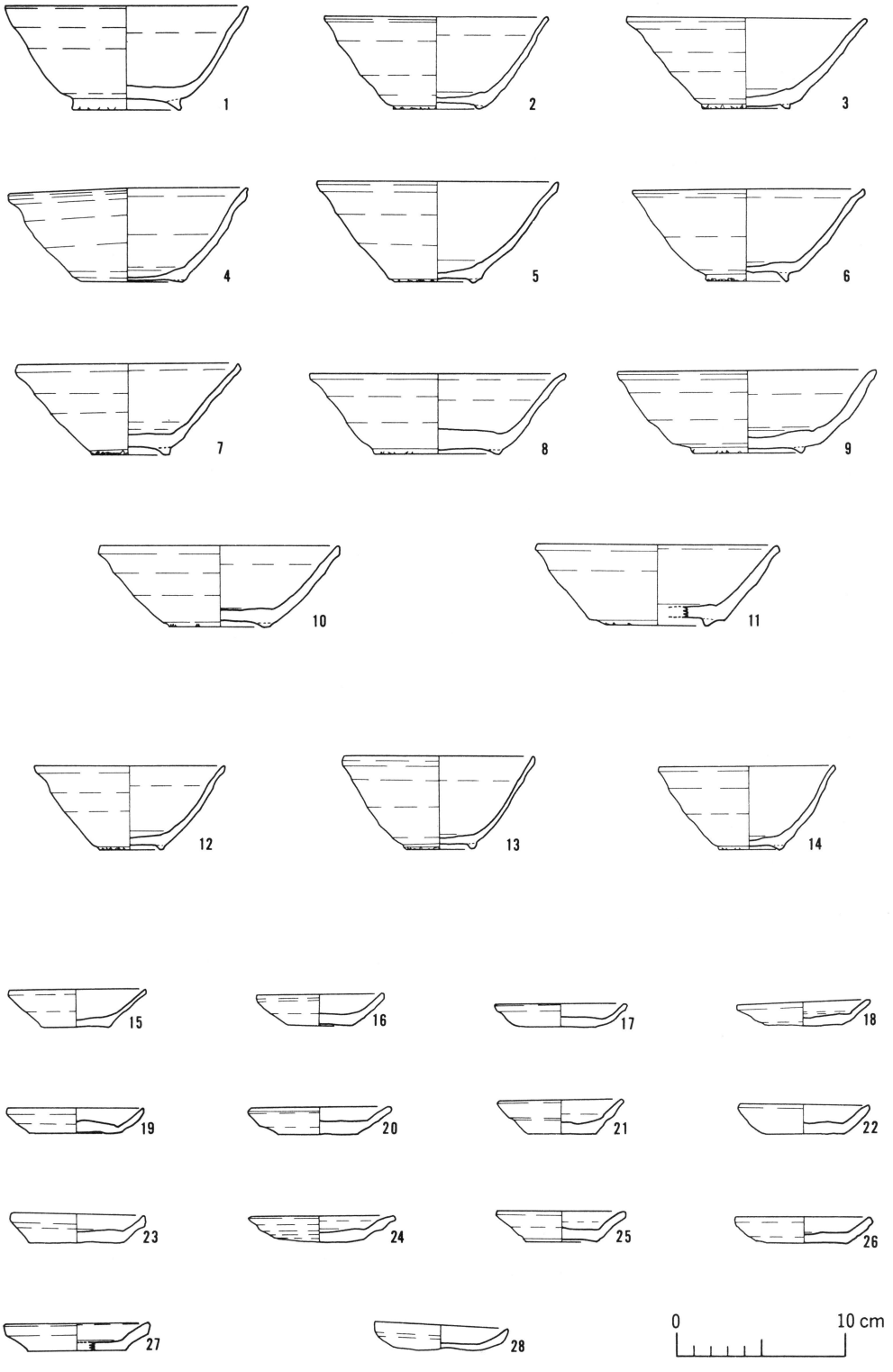
椀A_3（第３図７）体部が直線的に開く。口縁端部はやや内傾し尖る。内面底部は平面で体部との境に明瞭に稜を作る。胎土は細かいものの石粒を多く含む。

・椀Ｂ

椀B_1（第３図10・11）腰部に丸みがあり、口縁直下で外反する。内面底部と体部との境が輪状に凹む。口径に比べ器高が低く扁平な感じを受ける。

椀B_2（第３図10、第５図３・４）腰部に丸みを残し、口縁直下で外反する。口縁部を幅広く面取りするため端部の尖るものが多い。高台はつぶれて断面台形を呈する。内面底部中央は強くナデられ、体部との境には稜を持つ。口径は14cm前後、器高は５cm前後である。数値によればかなり規格性が見られる。

椀B_3（第３図11、第５図５～７）腰部に丸みがなく直線的に立ち上がる。口縁直下で若干外反する。内面体部も湾曲しないために底部との境に角を作る。口縁部は広く面取りし、端部を尖らせる。この類は、口径と器高の比率から２種類に細分可能である。１つは、口径に対する器高比（以下、対口径比）[(2)]が35％前後のもの（第３図10・11、第５図５・７）、もう１つは対口径比が40％を越えるもの（第５図６）である。



第3図　III層出土遺物実測図

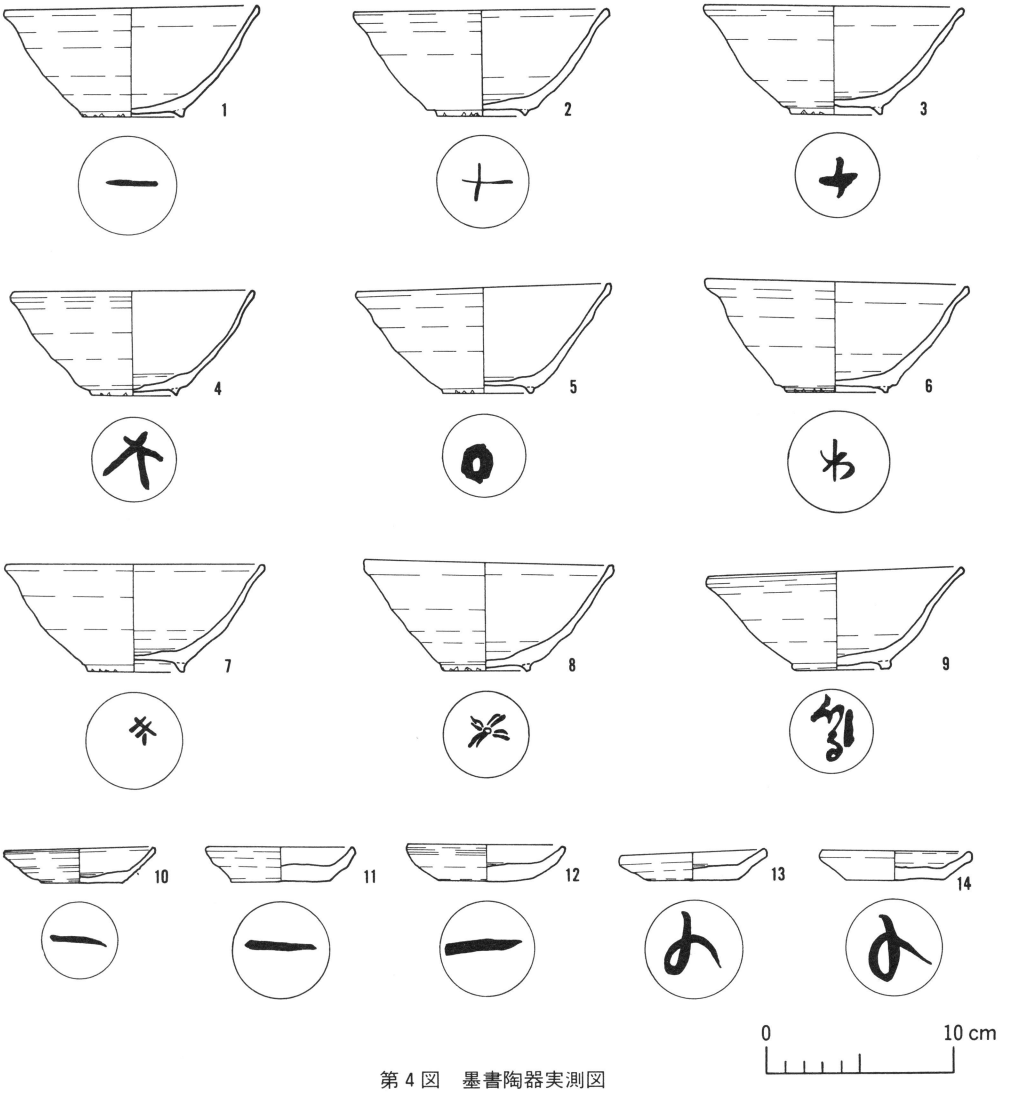
椀B_4（第５図８）無高台であり、形状は椀B_3と共通する。

・皿Ａ

皿A_1（第３図15・16、第５図９）体部は直線的で、内面底部は丸く滑らかに仕上げられる。口径８㎝前後、器高２㎝前後を計る。

皿A_2（第３図17～19）内面底部と体部との境に輪状の凹みを持つもので、底部中央が盛り上がる例が多い。体部は直線的で、口縁端部に面取りを行う。対口径比が20％を下回る低い器形である。

皿A_3（第３図20、第４図10、第５図10）体部は直線的で、口縁端部に面取りを行う。内面底部は平面的で、体部との境は明瞭に稜が作られる。底部中央には強弱の差こそあるも



第４図　墨書陶器実測図

ののナデが見られる。第４図10は極薄手で他の２例とは区別されよう。

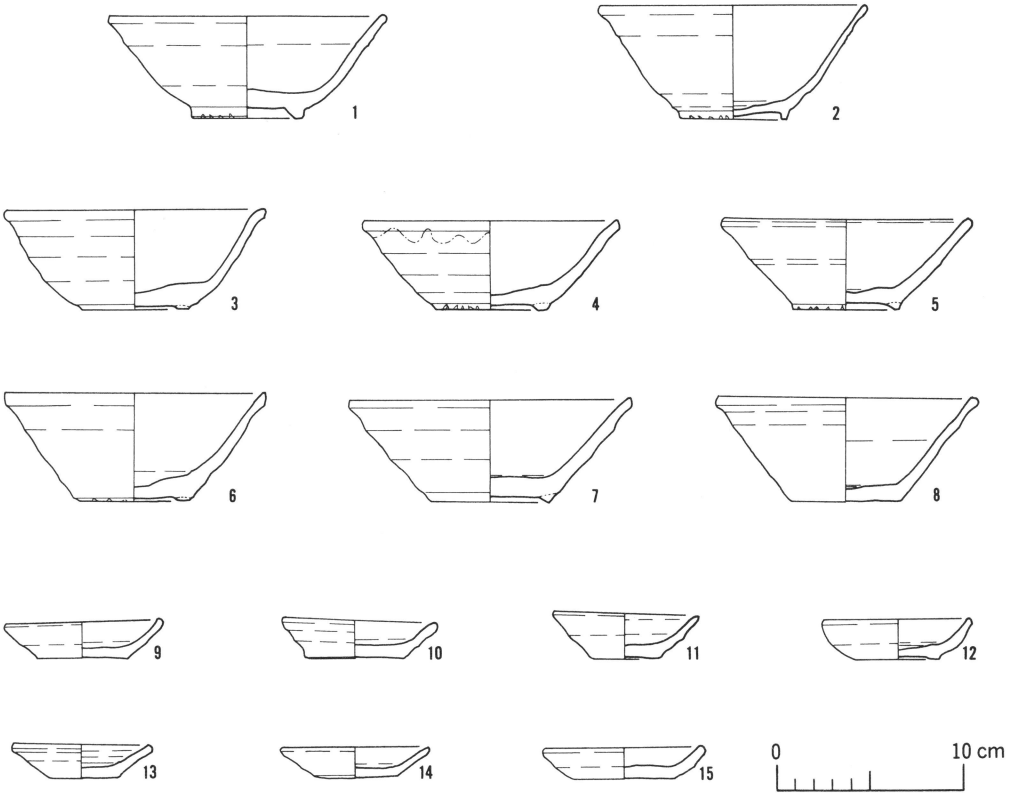
・皿Ｂ

皿B_1（第３図21、第５図11・12）この種に該当するものは、腰部から口縁部に向って先細りする点と対口径比25％前後を計る点で共通する。それ以外は非共通点が多く、細分の検討を要する。

皿B_2（第３図22～27、第４図11～14、第５図13～15）器壁の厚さが体部・底部とも均一で、口縁部に幅広い面取りが見られる。器高が２cm以下で、対口径比20％前後と扁平な形状を呈する。これらは、体部の形状から３種類に細分可能である。１つは腰部から口縁部まで直線的に立ち上がるもの（第３図22・23・26、第４図13・14、第５図13・14）、１つは体部が外反するもの（第３図24・25・27）、もう１つは体部が内湾するもの、（第４図11・12、第５図15）である。

土師器皿（第３図28）薄手で口縁部がやや肥厚する。口縁端部は鋭く尖る。底部は帯状に底上げされる特異な形状を呈する。

このように、椀Ａを３類、椀Ｂを４類、皿Ａを３類、皿Ｂを２類に分けた。墨書陶器（第



第５図　Ⅰ層出土遺物実測図

4図）は確認できるものがすべてⅢ層出土であり、その内、椀に限ればすべてが椀A_2である。皿はB_2が多い。

椀に限定して時期区分を追ってみると、それぞれの形状から、A類は椀A_1と椀A_2・A_3に大別でき、B類は椀B_1と椀B_2・B_3・B_4に大別できる。この内、Ⅲ層には椀B_4が存在せず、Ⅰ層には椀A_3・B_1・皿A_2が存在しない。つまり、Ⅰ・Ⅲ層共に椀A_2・椀B_3が認められ、両層間に決定的な時期差はないと思われる。ただ、両層の埋土から、Ⅲ層は溝の活動時、Ⅰ層は溝の放棄時という区別ができるのみである。

4．ＳＤ105の性格分析

これまで述べてきた事実関係と遺物の出土状況をもう一度整理し、総合的に分析することによって、ＳＤ105の性格を解明してみたい。

1．Ⅰ・Ⅲ層とも遺物は西側斜面に偏っている。

2．Ⅲ層の遺物に完形の椀・皿（特に椀A_2類）が目立つ。

3．Ⅲ層の椀・皿のうち、椀Ａ類が集中的、椀Ｂ類が散在的に分布する（第１図左）。

4．Ⅲ層の遺物のうち、椀の中に皿を重ね入れる組合せが４組見られる（第３図４と第４図10、第３図13と同図19、第４図１と第３図28、第４図９と第３図26）。

5．墨書陶器はすべてⅢ層出土である。

溝が東へ折れることから溝の東が内側、西が外側と推定できる。つまり、１より、遺物は外から廃棄されたことになる。また、２・３より、椀Ａ類の完形を西肩の一点から入れたことがわかる。その位置で肩が外に張らむこともこの推測を裏付けている。そして、４・５は呪術的、儀礼的意味合いを持つものと思われる。

このような解釈の上で総合すると、次のような推論が成り立つ。溝の外側（西側）に居住する庶民が溝の内側（東側）の空間に対し一種の神聖意識を持ち、椀・皿等を捧げたのではないかと思われる。これに該当する椀が椀A_2類であり、これらは表面が滑らかで奇麗な椀であることから、「奇麗なもの＝貴重なもの」と考え、捧げられたのではあるまいか。つまり、ＳＤ105は俗世界と聖界とを画する溝といえる。なお、４の椀・皿の組合せは、椀については椀A_2類に限られるのに対し、皿はＡ類が１点、Ｂ類が２点、土師器皿が１点と別れる。このことは、椀に比較して皿への価値観の低さを感じさせる。

5．まとめ

本稿は、ＳＤ105の性格分析を目的とした。そして、溝の性格から、広げて溝を挟む東西両域の性格まで推論し、結果として祭祀的性格を導き出したのであるが、溝一条のみの考察であり、かなり危険を伴った結論であることは否めない。今後、面的調査を重ねることによって解明されていくものと思われる。

なお、椀A類は一般に「均質手山茶椀」と呼ばれる椀である。春日井市では北東端に位置する内津第1号・2号窯(3)がこれに該当する。この古窯に見られる椀はSD105の椀A_2類に酷似する。春日井市には須恵器窯が多く、無釉陶器に関しては内津第1号・2号窯より他に例を見ていないが、SD105に椀A_2類が多いことは消費地である松河戸遺跡と生産地である内津古窯との間にある程度の関わりがあると考えられる。今後の研究課題のひとつである。

内津第1号窯の資料は春日井市教育委員会の古澤直道氏のご好意により実見させていただいた。文末ではあるが記して謝意を表する。

註

(1)松河戸遺跡63L区で13世紀代の溝1条が検出されたのみである。
(2)器高÷口径
(3)春日井市教育委員会　1981　「内津第1号窯」『春日井市遺跡発掘調査報告　第7集』

参考文献

藤澤良祐　1982　「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』
田口昭二　1983　「美濃窯における白瓷と山茶椀」『土岐市美濃陶磁器歴史館報Ⅱ』
愛知県教育委員会　1983　『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』
財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1987　『土田遺跡』
愛知考古学談話会　1987　『マージナル　No.7』